

公開シンポジウム「児童虐待への文理融合アプローチ—世帯の貧困、おやこの支援に着目して—」2020.9.3.

参加者アンケート

この資料に関するご質問、ご要望がございました場合は、理化学研究所脳神経科学研究センター親和性社会行動研究チーム ristex-oyako@brain.riken.jp または東京国立大学子ども・若者貧困研究センター kodomo@tmu.ac.jp までお問い合わせください。

質問やコメント	発表者からの回答
<p>貧困の連鎖を研究していますが、やはり虐待の連鎖も貧困と相関関係があるということですね。貧困についてはひとり親世帯の貧困（シングルマザーを中心に）を研究していますが、所得の低さは大きな要因となっていると考えていますが、先生は最も重要な要因は何とお考えでしょうか。</p>	<p>（阿部）ひとり親（母子）世帯の低所得の要因は、1）勤労所得の低さ、2）（元夫からの）養育費の少なさ、3）公的支援の手薄さ（他国に比べ）の3つがあるかと思います。</p>
<p>経済的に苦しくなると、虐待が増えるとお話ですが、自分の子どもに虐待するという理由にはならないのではないのでしょうか。弱い者に行動を起こすということはある程度のことだとは思いますが。離婚の理由にDVが多いという結果もあるようですが、この点と合わせてご回答をお願いします。</p>	<p>（阿部）虐待する「理由」にはなりません、経済的困窮が過大なストレスを親に与え、それによる親自身の精神状況の悪化などが虐待をしてしまう「要因」となると考えています。</p> <p>（黒田）経済的困難と虐待の相関は昔から有名ですが、必ずしも貧困だから虐待するという因果関係とは限りません。実際に貧困が虐待リスクを高める場合もある一方で、背景にある養育者のメンタルヘルスの問題が貧困と不適切養育の両方を招くような場合もあります。今回の発表のような相関を調べる研究においては、このような「疑似相関」関係にも注意が必要です。</p>
<p>環境要因を通るパスを断つことが可能とおっしゃる「環境要因」とは具体的に何を指していますでしょうか。</p>	<p>（阿部）環境要因は、貧困、ワークライフバランス、公的支援などを意図しております。</p>
<p>「行き過ぎた体罰」規定要因について、被虐待経験なしの母親は子の状態と「行き過ぎた体罰」との関連は見られないとのことでした。被虐待経験なしの母親は、子に感じるストレスが、体罰ではなく、例えば、過干渉（マロトリートメントの一つとされていたかと思いますが）という形で表れている可能性もあるのでしょうか？被虐待経験の有無によって、なぜ母の感じるストレスに子の状態が影響しなかったりするのかわからず、上記のように考えた次第です。</p>	<p>（阿部）推計の手法により、ここで「有意か有意でないか」はそれぞれのサンプルの中の差を見ている。被虐待経験のある母親は、自分自身の被虐待経験やその他の要因もあり、そもそも虐待に至るリスクが高いので、子どもの状況の差はあまり関係がないということがあがると思います。虐待経験がない母親は、そもそもリスクが低い中で、子どもの状況が悪いと、それによるリスク悪化が「見えやすい」ということです。</p>
<p>三世帯同居かどうかで、ひとり親の健康状態が大きく変わるの面白いですね。直感的には理解できますが、今回の調査では不明だと思いますが、ひとり親が三世帯同居をしないという選択をする理由が気になります。（おそらく、亡くなられている、不仲、職場の立地など様々に考えられますが、）その理由によってもまた健康状態に違いがあるのではないのでしょうか。</p>	<p>（加藤）三世帯同居の有無の理由についてですが、ご指摘の通り、いろんな理由が考えられます。国民生活基礎調査は、同居している場合は、祖父母の情報が連結できるのですが、同居していない場合は、情報がないので、残念ながら比較できません。今回示していないのですが、同居なしは、都市部に多く、実家（地方？）を離れているものと思われれます。なので、なんらかの理由で親を頼れない、頼りたくない理由があるのかもしれないです。今回の分析は、乳幼児がいる母親に限定しており、平均年齢は、33.6歳（同居なし）、31.4歳（同居あり）となっています。</p> <p>祖母が30歳前後で母親を産んだと仮定すると、祖母の年齢は60～65歳くらいなので、まだ健康状態が悪くないと思われる年齢なので、介護のために同居の割合は少ないのではと推測しています。推測ばかりで大変恐縮ですが。</p>
<p>親の幼少期の逆境体験が子どものメンタルヘルスへ悪影響を及ぼすという知見を踏まえて、いかなる支援が考えられるのでしょうか。政策的介入として、そうした不利の連鎖のどの部分にアプローチすることが必要であるとお考えでしょうか。</p>	<p>（加藤）介入についてですが、私は乳幼児期が専門なので、幼児教育の充実が大事だと考えております。経済学分野の研究で、貧困層にこそ幼児教育が効果的であるとの知見が出てきており、この知見は、私の直感とも一致しております。親の行動を変えるのはかなり大変なので、質の高い幼児教育を提供することで、少しでも不利な状況の影響を減らすことが重要だと最近考えております。</p> <p>学童期・思春期においても継続的な介入が必要だと思っておりますが、そのあたりは専門ではないので、具体的なアイデアは有りません。学校が関わってくるので、公衆衛生分野が手を出せないという問題もあります。</p> <p>効果的な介入をタイミングよく提供していくためにもデータの利活用は必要不可欠だと思います。そのあたり、日本は、前近代的です。。</p>
<p>「実母不在の影響」について、「実母不在」としても、例えば、父子家庭など、どのような家族構成であるかが関係要因と考えますが、その因子の分析はないのでしょうか。</p>	<p>（黒田）実母不在の場合、再婚等により養母がいたケース、社会的養護、祖父母との同居などの状況がありました。それぞれのケース数が少なく、また18歳まででそれらが混合している場合が多いため、家族構成ごとの因子分析は難しいのですが、その影響について解析できないか考えてみます。ありがとうございました。</p>
<p>お子さんの年齢が高い（思春期以降、あるいは青年期）場合にも適用可能なプログラムは実施していますか？究極的には、親になる直前（成人期）に、自身の親との親子関係を修復したい、などの適用がありますでしょうか。</p>	<p>（白石）思春期以降のお子さんを持つ養育者に対応できるプログラムには、GAREがあります。ほかには、5歳から18歳までのお子さんと養育者が一緒に受けるAF-CBT、思春期の子どもたちにも対応できるグループプログラムフレンズフォーライフがあります。</p> <p>成人された場合は、親との関係修復は難しい場合もありますので、まずはご自身の生きづらさを解消するような認知行動療法はいかがでしょうか。子ども時代の逆境体験そのものの苦しさ以外にも、その後の対人関係に苦慮される方が多く、そのためのSTAIR/NST（感情と対人関係の調整スキル・トレーニングとナラティブ・ストーリーテリング）というトラウマ治療があります。そのほかには、マインドフルネスやヨガ、自助グループへの参加もおすすめてです。</p>

<p>子の状態 「子どもの授業理解度」と「被虐待経験ありの親」との相関が1.40となっております。 被虐待の親は、勉強ができる子どもには虐待しにくいということかと思いますが、何か考察があればお願いできますでしょうか。</p>	<p>(阿部) 数値は、被虐待経験ありの親の中で、子どもの授業理解度による虐待リスクの差がどれくらいあるかという数値です。そのほかの要素がすべて同じである場合、勉強ができないお子さんに対する虐待リスクが勉強ができるお子さんに対する虐待リスクより高い・・・ということです。その他の影響がある中、子ども側の問題がより拍車をかけてしまうという状況なのかと推測されます。</p>
<p>学歴は影響大!⇒困難な生育環境下の子の就学支援 (中学での不登校(男子)、けんか(女子)があるとき、低学歴と相関が高いので注意する)低学歴でも低収入にならないための支援 (子ども手当など)早期育児世帯、ひとり親世帯への支援 (要支援妊産婦、養育費立替制度・・・)との話がありました。私は、スクールソーシャルワーカーをしています。学歴だけを考えていいのか、と考えます。IQとの関連性があるのではないのでしょうか。伝え方として難しいのですが、ボーダーラインの親による虐待です。子どもたちもボーダーラインのように思います。ですから、環境による影響だけでなく、学習支援しても呑み込めず、集中できず、高校進学を見据えても、難しい。どのような、支援を考えたらよいでしょうか。</p>	<p>(黒田) 知的障害等の場合を仰っていると理解しました。もちろん、学歴を伸ばすということだけが重要なではなく、それが難しい場合には、そこから時系列的に後に起こる、子育て困難につながりやすい要因、たとえば低収入や、望まない早期育児などを減らすような支援があればよいのだと考えております。たとえば手帳や生活保護の取得支援、性教育などが考えられます。</p>
<p>移民研究を行っており、外国につながる子どもの困難・支援に関心があります。支援プログラムの支援対象として、「外国とのつながり」が挙げられていたのですが、受講者の中には外国につながる親子も含まれているのでしょうか。また、調査票では、外国とのつながりがわかるような質問項目が設定されているのでしょうか。</p>	<p>(白石) 日本には、様々な文化や言語を使う方が暮らしています。そして、その方々には制度上の問題などで公的な支援が届きにくいなどの課題があります。おやこ支援プログラムモニター事業にも、外国の文化を持つご家族が参加されることはありますが、言語の問題など、現在は十分に対応ができておりません。今後は、外国語で受けられるプログラムや調査の整備も検討していく必要があると考えております。</p>
<p>プログラムX群の学歴が有意に高いのは、なるほどと思いましたが、心理的虐待の傾向も高いですね。学歴の高さと虐待傾向は基本的には反比例するようですので、一見矛盾する結果でしょうか。 プログラムX群の中には、実際には、子育ての知識獲得に積極的な層と、子育てに不安を抱えている層に分けられ、前者の学歴が高く、後者の心理的虐待傾向が高いような気がします。いかがでしょうか。</p>	<p>(白石) 全体の傾向としては、被虐待体験と学歴は負の相関をします。X群にも様々な方がいらっしゃいますが、被虐待体験がありながら、大学、大学院を卒業された方もいらっしゃいます。人数が少ないので、ご指摘のような解析は難しいのですが、今後検討してみます。</p>
<p>児童虐待はジェンダー平等の問題と関連していることが明らかになったと思います。両者をどのように接続し、枠組みを組み替えていくことができるのか、教えてください。</p>	<p>(阿部彩) 貧困、劣悪なワークライフバランスといった環境要因が、男性よりも女性の方が状況が悪いことは、まさに日本のジェンダー問題に絡んでいるところかと思えます。女性と男性の労働市場における格差、ケア役割の男女間の不平等な分担、これらはジェンダー問題の根幹かと思えます。</p>
<p>虐待の連鎖は虐待のマジョリティではないというご指摘に膝を打ちました。虐待を受けてもマジョリティは虐待する側にならないという事実は、虐待を受けたことを不安に思っている方たちをカブけると思えます。あの図の出所を教えてください。</p>	<p>(阿部) ありがとうございます。元データは、東京都(2016)「子供の生活実態調査」ですが、あの集計表は今回初めて作りました。近日中に、当センターのWPとしてセンターのHPに掲載いたします。</p> <p>(黒田) 「虐待の連鎖」海外の縦断研究やメタアナリシスにおいても、①虐待を受けた人が将来自分の子に虐待をする率は、虐待を受けていない人に比べ若干高くなるか、研究によってはほとんど変わらないこと、また②虐待を受けた人の過半数が虐待を繰り返さないこと、が報告されています(Ertem et al., 2000; Widom, 2015)があります。文献詳細は「行動の脳科学からみる子育てとその問題」黒田公美・白石優子、発達157号(2019)をご参照ください。http://parent-supporters.brain.riken.jp/assets/2019hattatsu.pdf</p>
<p>総じて父親の話があまり触れられなかったのが残念でした。</p> <p>虐待死や放置死についても、父親、妊娠させた男性の責任についても論じていかなければ、女性はほとんど体調不良になり、出産・育児(結婚)のモチベーションが出なくなると思えます。女性に働き、家事も育児もやれ、介護もしるという社会システムを変えなければいつまでたっても同じ状況だと思えます。</p> <p>学歴と貧困や虐待の相関関係が明らかなら、ひとり親の母親の大学教育を受けさせる支援等も行う必要があると思えます。</p> <p>また、離婚についてネガティブな印象が多かったような気がするのですが、その喪失感に関する子どものケアや女性のケアは日本にも少ないですが存在します。DV被害を受けているケース(子どもが親のDVを見て育つケース)は、むしろ離婚した方が子どもの健康度が上がるという調査を行ったことがあります。</p> <p>特にジェンダーに関する社会通念を変えるようなデータがもっと増えることを期待します。</p>	<p>(加藤) 父親に関する情報が少ないというご指摘は仰るとおりです。言い訳をさせていただくと、子ども関連の調査をすると大体、母親が回答します。父親にも回答を求めている調査もありますが、回答率は高くありません。また、「母子保健」という言葉が示している通り、妊娠期～乳幼児期における行政の取り組みは、母親を対象としたものがほとんどです。</p> <p>ちょっと宣伝っぽくなってしまいますが、現在、父親の育児参加を対象とした厚生労働省の研究班が立ち上がっています「わが国における父親の子育て支援を推進するための科学的根拠の提示と支援プログラムの提案に関する研究」。そちらで父親に関する知見を出していきたいと考えておりますので、ご支援のほどよろしく申し上げます。</p> <p>離婚に関して、マイナスの情報を出すことで、「離婚は望ましくない」という社会規範を強化するのでは?という同様の指摘がいくつかありました。私は離婚自体が望ましくないとは全く思っておりません。特にパートナーからのDVなどがある場合、離婚を選択するのは当然であると考えます。私は、もっぱら子どもを対象とした研究をしていますので、そのような状況下にある女性に対してどのように介入/ケアを行えばよいのかわかりませんが、サポートはあってしかるべきだと思います。</p> <p>私の大きな目標として、「貧困家庭に生まれたから」、「親が離婚したから」、「親が外国人だから」、「障害を持って生まれたから」といったような子どもがコントロールできない理由で、子どもの成長に負の影響を及ぼす環境を改善したいと思っています(=機会の公平を保障する社会の実現)。</p> <p>(白石) ご指定の通りと思います。若年妊娠、出産においても、本人が希望していれば学業に戻れる(あるいは並行できる)システムが必要だと思います。DV被害があったとき、まずは避難する、そして離婚、ひとり親で育てることはとても大変なことです。親子の安全で健康な生活を取り戻すには重要なことであると考えています。また、被害の親自身のメンタルヘルスの問題や子どもの面前DVによるトラウマ、生活環境やその後の再婚、次子誕生等による様々な変化においても、心理教育的なプログラムが役立ちます。アメリカのカウフマンプロジェクトでは、子どものトラウマに有効なプログラムに、PGIT、AF-CBT、TF-CBTが挙げられています。もちろん、安全な住居の確保や経済的な支援の制度も今以上に必要であると思えます。</p>

<p>地域で活動している助産師です。講話の中にもありましたが、貧困が虐待に繋がっていることもあります。生活に追われて子どもと関わる時間が少なく、そして子どもとの関わり方がわからず感情のままの行動が虐待に繋がっていることが多い、体罰が良くないということの自覚もありません。どこを変えればと悩みます。今回学んだことを今後の活動に生かしていきたいと思います。</p>	<p>(加藤) 地域での活動ご苦労さまです。貧困世帯は、お金だけでなく、使える時間も少ないという研究も出てきています(「時間貧困」の概念)。研究者の立場としては、状況を可視化することで、支援の重要性に対する社会の理解が深まるよう努力していきます。</p>
<p>私はSSWとして公立の小中学校に関わっています。不登校の子どもたちの多くは家庭に課題を抱えています。家庭の背景は様々ある中で、それぞれのどこにポイントを置いて支援をしていくのが重要となります。思うようにいかないことも多々ありますが、本日の先生方のお話から、改めてヒントをいただいたような感じがします。私自身、足元をしっかり固めて、それぞれのケースに真摯に向き合っていくと改めて思いました。</p>	<p>(加藤) コメントありがとうございます! 不登校に関しては、相当数いるにも関わらず、私の知る限りほとんど(疫学的)研究が進んでおりません。今回、小学5年生のうつ傾向に関して、少し触れましたが、その点に関して研究を進めていきたいと思っております。</p>
<p>養育里親をしています。今日は児童虐待に関して、先生方のとても内容の濃いコメントに触れることができ、あつという間の数時間でした。現在、幼児に加えて乳幼児もお預かりしており、今回オンラインで開催して頂けて参加が叶いました。ありがとうございます! 微力ながら里親として後方支援を続けていきます。傷つく子どもたちに途方に暮れることもありますが、今回お話を伺い勇気付けられました。一緒に頑張らせて下さい!</p>	<p>(阿部) ご参加ありがとうございます。里親さんには、本当に頭が下がる思いです。里親の方々の支援になるような研究もしていきたいと思っております。</p>
<p>地方ではあまり聞けない研究事例を多く聞けることができ有益な時間でした。</p>	<p>(阿部) オンライン開催のメリットで、距離に関係なく参加して下さる方があり大変うれしく思います。</p>
<p>最新の研究の知見を意欲的にご紹介頂き、ありがとうございました。サービスが届く方法として、フィンランドのネウボラを真剣に導入してほしい。</p>	<p>(阿部) ネウボラは着目度が高いですね。日本でも導入している自治体あります。</p>
<p>ひとり親の支援を長らくしています。気になった点 ①ひとり親、特にシングルマザーのうち離婚が原因のシングルマザーは8割程度でそれ以外は未婚と死別となっていることから、離婚が虐待が生じる一つの環境的要因であることの説明には「離婚をしたひとり親」と言った区別をつけて欲しいと感じました。死別、離婚、未婚とで、受けられる支援制度、社会保障も異なり、また、実際平均所得も異なっています(学歴の差異もかなりあります)。例えば離婚による喪失感や経済的落差は、未婚にはありません。また、三世代同居率についても、死別、離婚、未婚では差異が大きいです。持ち家率も同様です。 ②「離婚」が影響、といった表現については、ひとり親(離婚)による収入確保のため就労による育児時間の減少、ひとり親特にシングルマザーの所得の低さによる、と言った「離婚」してひとり親になったことで、何が奪われるのか、何が困難となるのかを付け加えて説明をして欲しい。「離婚」自体が虐待の原因にはなりようがない。「離婚」によってほとんどの方がパートナーとの精神的な軋轢やハラスメントから開放されているので。 以上、「離婚が悪い」と誤解する人がたくさんいるので、お願いいたします。</p>	<p>(加藤) 貴重なご指摘、ありがとうございます! 今回の分析においては、離婚・未婚・死別に関して明確に区別しておりませんでした。難しい点として、ひとり親世帯は、全体の5%しかおらず、さらに、内訳は、「離婚」によるひとり親が81%、「死別」が3%、「未婚」が16%となっていることから、「死別」群や「未婚」群に関する確かな情報が得づらい状況です。 なお、3世代同居の有無、メンタルヘルス、子育てに関する費用などに関して、これらの3群の間で明確な差はなさそうでした。ただ、今回の分析は、乳幼児がいる世帯に限定しているため、ひとり親の中で分析を行うなら、子どもの年齢の幅を広げて、対象者を増やしたほうが良いのかもしれないと思います。いずれにせよ、精査が必要だと思います。 離婚に関して、マイナスの情報を出すことで、「離婚は望ましくない」という社会規範を強化するのでは? という同様の指摘がいくつかありました。私は離婚自体が望ましくないとは全く思っておりません。特にパートナーからのDVなどがある場合、離婚を選択するのは当然であると考えます。私は、もっぱら子どもを対象とした研究をしておりまして、そのような状況下にある女性に対してどのように介入/ケアを行えばよいかのかわかりませんが、サポートはあってしかるべきだと思います。 私の大きな目標として、「貧困家庭に生まれたから」、「親が離婚したから」、「親が外国人だから」、「障害を持って生まれたから」といったような子どもがコントロールできない理由で、子どもの成長に負の影響を及ぼす環境を改善したいと思っています(=機会の公平を保障する社会の実現)。</p>
<p>初めての参加でしたが、たまたまホームページで当シンポジウムの開催を知り、ラッキーでした。私は会社員(今日は平日ですが仕事はお休み)で、主に書籍を通じて児童虐待の問題を学んでいたため、今日のように最前線で研究を重ねられている先生方のお話を聞く機会は本当に貴重でした。シンポジウムは定期的で開催されているのでしょうか? 次回もしあれば、ぜひ参加させてください。改めて自分ができることを考える良い機会となりました。ありがとうございました。</p>	<p>(阿部) 黒田PJとのコラボのこのような大きなシンポジウムは年に1回2回あるのみですが、当センターでは、定例研究会を毎月開催いたしています。ぜひ、ご参加ください。 (黒田) 私どもの関係する公開シンポジウムの情報は、こちらに掲載されています。一度ご参加いただくと、次回以降、公開シンポジウムがあればお知らせすることも行っております。ご参考になれば幸いです。 <a href="http://parent-supporters.brain.riken.jp/">http://parent-supporters.brain.riken.jp/</a></p>
<p>学習支援事業で家庭訪問・学習支援をしています。家庭訪問をしていると家の中まで見えるので、虐待やそれに近いこともよくわかります。支援していて感じることは、相談する相手がいない場合に虐待に近いことは多いということです。最後のディスカッションでavailableでないと書いていたのですが、それはすなわち家の中の状況を「わかる」人がいないという意味で私はとらえました。家の中の状況を誰かが「わかる」ことが相談できる第一歩で、虐待を防ぐのではないのでしょうか。学習支援でも、学校の先生でも保健師でも民生委員でも誰でもいいけれど、「わかる」状態を作り出す必要があるかと思いました。 宮島さんがピラミッドモデルを同心円モデルにしようと言っていました。ふと、ピラミッドモデルを上から見たら同心円モデルになるなと思いました。横から見るとわかることと上から見るとわかることがあります。ピラミッドモデルは量がよくわかり、同心円モデルは支援の重層性の必要がよくわかるものだと思います。ピラミッドモデルだと「自分には関係ない」が強調されます。少しわかりづらいところを改良しつつ、同心円モデルの見方も広がっていくといいと思いました。</p>	<p>(阿部) ご活動、注目しています。相談できる相手の重要さは常々感じております。</p>

<p>育児支援が唯一の解決策であることが「常識」となってきたことを実感できました。黒田先生の「現在の脳」が決定するという結びの言葉が感動的でした。注文を申しますと、日本の育児支援がOECD諸国と比較して予算的に圧倒的に足りないことなど、経済学的な分析が日本国内の視野にとどまっていたのが少し残念でした。</p> <p>3歳から義務教育となっているフランスでは、その教育現場に定期的に児童精神科医がまわり、先生たちと意見交換して、育児のうまくいっていない子を発見し、パリ市がその報告に基づいて親の様子を調査して、育児支援を申し出てケースワーカーを派遣します。もし親が支援を断ったら、検察官が親権制限を提起して、判事が判断し、年間約10万件の親権制限判決を下して、強制的な支援を実現しています。日本の育児支援は、親が拒絶したときには機能しませんし、全体量が全く足りていません。課題は大きいものの、先生方のご尽力で、事態が前進するよう思えて、明るい気分になりました。</p>	<p>(黒田) ご指摘もとてもです。・次回は是非、国際比較など、もっと文化・社会制度や政策によせたテーマでも議論してみたいです。</p>
<p>ご登壇の先生方は非常にやりづらいい中での発表だったと思いますが、傍聴者としては、何のストレスもなく、スムーズで、かつ、職場からでも傍聴できるという大変ありがたい機会となりました。力不足ではありますが、子供たちのためにより良い環境になるように精いっぱいやっていきたいと思えます。まだまだ道半ばですが、データ活用についても積極的な自治体ですので、何か研究のお役に立てることがあればご連絡ください。個人としては小さなことしかできませんが、今後20年30年、子供たちのために自分にできることをしていきたいと思えます。</p>	<p>(加藤) コメント、ありがとうございます！自治体しかアクセスがない情報が沢山ありますので、しかるべき手順を踏んで、その情報を研究者に利活用させていただけると、Win-winの関係性が構築できると考えております。</p>
<p>虐待も貧困も安易に「連鎖」と言い過ぎるきらいがあると感じています。社会が「自分ごと」とするには、被害経験があっても加害しないケース、経験がなくても加害するケースの分析が必須であり、「経験なく加害する人が多い」とする阿部彩さんの分析を共有してこそ、新たな虐待防止策をつくることができると思えます。母親の被害経験の有無によって、経済や子どもの状況など、関連する項目が異なるというご指摘も大変興味深かったです。施策のしるべとなる具体的な分析、貴重なご報告をありがとうございます。</p> <p>加藤さんの分析では逆境経験として離婚を指標とされていましたが、離婚がリスク要因と過剰に印象づけられるのは、男女が不均衡で男性から女性への暴力が圧倒的に多い中、女性を婚姻に縛り付け、離婚の自由を奪うことになると懸念します。一指標として使われることに合理性はあったとしても、その視点は常に持って頂きたいと思えます。加藤さんに限ったことではありませんが。</p> <p>また黒田さんの「ほ乳類である限り虐待はゼロにはならない」というある種の連鎖も虐待を「自分ごと」とする大きな要素だと思います。発表中、グラフの読み取りが複雑で理解が追いつかないことが何度かあったため、今後の論文や報告を待ちたいと思えます。特にパーソナリティの分析をもっと詳しく理解したいです。経済状況やワークライフバランスなどの外部要因が変わると、同じ人でも衝動性やネガティブ思考、攻撃性などが変わります。どのような心理・思考パターンがリスクを高めるかが分かると、そのコントロール策も考えやすくなるように思えます。ひどい虐待をしてしまった方にもいい親子関係だった時期はあるのと同様、今は問題ない人もどのような状態になるとリスクが高まるのか、1人の人間の中の脳の状態とリスクを下げる対策について、ぜひ教えて頂きたいです。</p> <p>多くの分析で、低学歴はリスク要因になっているとのことですが、「学歴を積むとリスクが下がる」とは言えるのでしょうか。そうであるなら、そこで受けたいような教育が影響しているのかまでの分析はあるのでしょうか。コロナ禍による経済悪化でも大学の学費を払えない学生が多く生まれているように、卒業したくてもできない、進学したくてもできない人たちが多数いる中、「低学歴はリスク」は事実であったとしても、その情報しか出せないのは非常に心苦しく、また逆に「学歴さえあればOK」でもないと思えます。今後の教育を考える上でも、どのような力を付けることが重要なのかについて、ぜひ科学的に明らかにしていただきたいと期待します。</p>	<p>(加藤) 離婚に関して、マイナスの情報を出すことで、「離婚は望ましくない」という社会規範を強化するのでは？という同様の指摘がいくつかありました。私は離婚自体が望ましくないとは全く思っておりません。特にパートナーからのDVなどがある場合、離婚を選択するのは当然であると考えます。私は、もっぱら子どもを対象とした研究をしておりますので、そのような状況下にある女性に対してどのように介入/ケアを行えばよいかわかりませんが、サポートはあってしかるべきだと思います。</p> <p>私の大きな目標として、「貧困家庭に生まれたから」、「親が離婚したから」、「親が外国人だから」、「障害を持って生まれたから」といったような子どもがコントロールできない理由で、子どもの成長に負の影響を及ぼす環境を改善したいと思っています(=機会の公平を保障する社会の実現)。</p> <p>学歴に関して、貴重なコメントありがとうございます。学歴が何を意味しているのかに関して、仰る通り議論が必要です。ただ、私の知る範囲では、学歴は成人期の健康において、かなり強い予測因子です。なので、まずは社会がそのことを認識することが必要だと思っています。この話題に関連して、最近、「教育格差」(松岡 亮二)という本も出ておりますので、ぜひご参照ください。</p>
<p>ご感想</p>	<p>発表者からの返答</p>
<p>本日はありがとうございます。遺児に関わる仕事をしております。保護者の方との接し方、どうつなげていくのがご本人にとっていいのかと悩む時があります。今日のお話はとても参考になりました。是非次回も参加したいです。</p>	
<p>本日はとても濃い内容のシンポジウム、どうもありがとうございました。取材では「文系的」なアプローチになってしまうことが多いと感じますが、今回お話を伺っていて、様々な視点から虐待について見つめ直す重要性を実感しました。最後に黒田先生がおっしゃった「ほ乳類である以上、児童虐待がゼロになることはないけれど、でも取り組み続ければ減っていく」というお言葉、とても勇気づけられました。今後ともどうぞよろしくお願ひ申し上げます。</p>	<p>(一同) 様々な支援の現場の方、研究者の方にご参加いただき、ありがとうございます。今回は、オンライン開催のメリットで、距離に関係なく参加してくださる方があり大変うれしく思います。みなさまのお言葉に励まされて、日々研究しています。</p>
<p>子どもシェルターをやっているシェルタースタッフです。目の前の子どもたちのことを考えて、皆様のお話を伺いました。この子達がすぐ親になっていく現実を見て来まして、希望と恐れで日々過ごしています。特別な、福祉や医療が必要な人たちとしてとらえるのではなく、保健分野で考えることが必要なのだなと気づきました。その為には、社会全体の前に、福祉・医療分野に携わる人たちの意識変革がまずは必要な気がしています。これから、資料を見直して、考えてみたいと思えます。ありがとうございました。</p>	

<p>乳児院に勤務しております。最後に黒田先生が、重大な虐待は減っているのではないかと発言されていましたが、現場で仕事をしておりますと全く逆を実感しています。入所してくるケースはどれも重複した課題を抱えて、家庭復帰が難しいケースが以前よりも確実に増えていると感じています。</p> <p>しかし、研究者の先生方がこのように一つひとつ丁寧な調査をしてそれをまとめてくださると、自分たちが普段している支援の根拠が数値化され、支援の振り返りになります。また、阿部先生のワークライフバランスのご発表も大変興味深く感じました。子育ては福祉や医療だけでなく親の働き方も含めた様々な対策が必要であると常々感じています。</p> <p>とても充実した時間を過ごすことができました。ありがとうございました。</p>	
<p>理解・認識が深まるとともに前向きな方向性もお示しいただいたシンポジウムでした。子どもの発達に影響する不適切な子育てレベルが非虐待レベルに留まる要因を考えたいと思いました。科学的であることで幸福に貢献したいと思います！</p>	
<p>私は、母親支援につながるよう研究を進めております。自分の育児体験や、臨床で感じることを研究につなげることの難しさを感じる日々でございますが、本日の先生のご発表を聞かせて頂き、目の前の困難を抱える方々の声を研究という形で代弁され、さらに支援の可能性、方向性を示していかれていることに感動しました。</p> <p>今日ご発表下さった研究についても論文を読ませて頂ける日を楽しみにしております。</p>	
<p>本日は貴重な講演ありがとうございました。様々な社会的ハンデを持っている親子と接する中で、ともすれば機序の空論とも感じてしまう提言の多い中、今回の先生方の研究に接し、腹落ちする部分も多くありました。今後益々の研究成果に期待いたします。多くの親子の何らかの一助が提供できるよう、微力ながら私も引き続き関わらせていただきたく思います。</p>	
<p>虐待対応の一環としての修学支援の必要性について興味深く拝聴いたしました。</p>	